

杉本經濟學の課題

山 田 雄 三

一 「異質的經濟體系」の把握

優れた學者の思想展開のうちには深くして廣い課題がある。それは、その人が一生をささげて取組んだものであり、しかもなお後に續く人々に向つて眞剣な思索を迫るものである。課題といつても、それが深く且つ廣いといわれるためには、そのアプローチの方途について種々苦心を重ねていくだけの内容をもつたものでなければならず、そういう苦心を積んで次第に育てられていった過程を含んで、それをわれわれは學者の心の内奥にさぐらなければならぬのである。杉本教授の場合それは如何なるものであつたか。

杉本教授の生前最後の作は『經濟學新大系Ⅱ恐慌』（昭和二十七年）に編集者として書いた「總説」であつた。教授は、その書出しに、千八百二三十年代以後資本主義體制が生成期から漸く成熟期に達し、恐慌の周期的な爆發を経験するに及んで、このような「周期的恐慌の過程としての不安定な經濟」を説明することが近代經濟學の「歴史的課題」となるに至つたと、述べている。同じような趣旨は、昭和八年頃から始まる教授の初期作のうちにも見出されるであろう。たとえば「複雑なる變動と不均衡とを貫いてそれ自ら貫徹するたえざる發展」とか、「いつかは恐慌を通

じて整理されざるを得ない過程」とかいものが、その頃教授の好んで用いた表現であつた。さらに遡つて、學生時代、福田先生の下に、マルクスの『資本論』を読み、卒論のテーマとしてシュビートの恐慌論をとりあげたことも、ここで思い浮べてよい。

しかし教授は、前掲の最後の作を除いて、本格的には恐慌論も景氣變動論も書かなかつた。恐慌を伴う不安定な體系が教授の關心事であつたとしても、それだけでは教授の思考の特色を示すには何かもの足らない。教授の課題としたところは、むしろかかる不安定を生ぜしめる經濟構造そのものの解明にあつたとも言えよう。その意味からはむしろ教授のいう「異質的構造」とか「異質的發展」とか呼ぶものの方が、教授の經濟學の中心課題を示すに適しているように思われる。ただ異質的構造とは何かということになると、簡単に一言では盡くし難い。教授によれば、種々異つた途を通じて波及する變動が、その到達點に於て全幅の作用を現わすまでに經過する時間について、それぞれ長短をもつていような構造（『理論經濟學の基本問題』一五七頁）と規定されている。しかしまた、別の箇處では、英米流の經濟を等質的と見、日本を含む東亞諸國の經濟をとくに異質的と名づけ（『統制經濟の原理』一〇九頁）、そこではいわゆる「複合社會」の如き混合體系が考えられていたようである。さらに進んで、今日の「市民社會」そのものが異質的構造であると言われている場合には（『近代經濟學の基本性格』四七頁）、單なる混合體系を超えて、階級對立に伴う矛盾の體系を意味していたようである。こういうように必ずしも一義的な解釋は與えられていないが、しかし異質的經濟體系の解明こそは教授の常に關心を寄せた中心課題だと解されるし、そこから不安定や恐慌の問題も考えられたと、私には思われる。

たしかにこのような課題はわれわれもまた十分共鳴を感じる。現實の不安定な經濟の根源に異質的體系なるものを指摘した教授の着目は尊敬されてよい。問題はその解明のアプローチにある。前に述べた如く、教授の論述のうちには、この異質的體系について必ずしも一義的な解釋は與えられていないが、このことは教授が長い間この課題についてあれこれと苦心を積まれたことを示すものに他ならないのであつて、われわれは、教授の長い學問的遍歴の跡を顧み、この課題の意味するところをもつと内容的に明らかにしなければならない。ここで私は、便宜上、次のような三つの時期を教授の經濟學展開について分けて見たい。

(1) 均衡に對して「不均衡」を考えた時期

(2) 自由に對して「統制」を考えた時期

(3) 調和に對して「矛盾」を考えた時期

もちろん、すべての思想展開がそうであるように、時期的區別といつてもそんなにはつきり劃されるものではない。區別し難い關連もあれば、前後の交錯もある。ただ大體の目安が示されればよい。ここで私のいう第一の時期とは、昭和八年の「靜態經濟學の破綻」(『中央公論』十月號所載)、昭和九年の「均衡價格成立の過程」(東京商科大学研究年報『經濟學研究』(3)所載)、昭和十一年の「一般均衡理論に對する若干の疑問」(日本經濟學會報告、後に東京商大研究年報『經濟學研究』(6)に所載)の三論文を中心とする時期であり、ここで教授は靜態均衡の理論を批判することによつて、「不均衡」なる構想を展開しようとした。これらの論文と併行して、この時期には實證的な米穀需要法則に關する尊敬すべき研究があり、それは昭和十年刊行の『米穀需要法則の研究』となつたもので、教授の殘された最も

尊敬すべき業績の一つと見られるのであるが、その理論的基礎も以上の論文のうちにうかがわれる。

この時期の諸論文は多少改變されて、主著の一つ『理論經濟學の基本問題』（昭和十四年）に收録されたが、しかしこの主著に含まれている一二の論文はむしろ私のいう第二期に屬しているし、また主著の序文そのものも第二期の觀點から書かれていゝと私は見ている。そこで第二期の時期というのは、不均衡な現實經濟を克服する方途として統制經濟の原理を探索した時期であり、その構想は主として昭和十五年の『統制經濟と流動性原則』（『一橋論叢』一月號所載）に結集し、後にこの論文を含んで第二の主著『統制經濟の原理』（昭和十八年）となつたものである。

私のいう第三の時期とはもっぱら戦後に屬し、昭和二十一年の『近代理論經濟學とマルクス經濟學』（『理論』第一號所載）なる論文を出發點とするその後の一連の諸論文を含む。この時期では、マルクス經濟學の積極的な攝取が意圖され、資本主義の矛盾の解明という觀點が明確に浮び上つて來た。著書としては『近代經濟學の基本性格』（昭和二十四年）をあげてよいが、そのうちには前の時期に屬する二三の論文も收録されていることを注意しなければならない。同時にこの時期において、教授は前述の觀點を根柢にもちながら、著しく學說史的興味に導かれており、それは『近代經濟學の解明』（昭和二十五、二十六年）となり、さらに遺著『近代經濟學史』となつた。ただし杉本教授の學說史的關心はこの時期に始まるものではなく、すでに昭和五年の『ロッシア—英國經濟學史論』の名譯以來、この方面の幾多の業績を残されていることは、ここに附記しておいてよからう。

いま私は教授の夥しい文獻について若干のものをとりあげ、私のいう三つの時期を規定する手がかりとした。理論・學史・統計各分野にわたる教授の諸文獻については、本誌卷末の目録を見ていただきたい。重ねていうが、私は

ここで杉本經濟學の中心課題をさぐるために、教授の學問的遍歴の跡をたどりたいのである。教授はいずれかと言えば他説の批判に力をいれ、自説の建設については觀點に多少ともずれがあつたように思われるが、同時にそれは教授が中心課題へのアプローチについて廣い視野に立とうとしたためでもある。近代理論もマルクス經濟學も廣く見渡して、眞剣に自己の途を切開こうとしたところに杉本經濟學の特色があり、そこにこそわれわれ後進の汲みとるべき教示があると、私は言いたいのである。

二 均衡に對する「不均衡」

杉本經濟學の第一期は靜態均衡理論への批判という形をとつて始められた。昭和八年の論文「靜態經濟學の破綻」では主としてシュムペーター批判がとりあげられているが、シュムペーターにとどまらず、廣くローザンヌ派的一般均衡理論が批判の對象であつた。これに對立して教授がこの時期に依據しようとした學説はマーシャルであり、このことは昭和九年の論文「均衡價格成立の過程」、とくに昭和十一年の力作「一般均衡理論に對する若干の疑問」に現われている。要するにこの時期における教授の關心事はローザンヌ派的一般均衡理論とケムブリッジ派的特殊均衡理論との對立ということであり、しかもこれを「均衡對不均衡」の對立と解しようとするところに教授獨得の觀點があつた。通説では、一般均衡論も特殊均衡論も等しく均衡論であるが、教授はこの「通説に反して」(教授自身の言葉)特殊均衡論のうちに不均衡體系の理論を汲みとらるるのである。かくて問題は、教授のいう不均衡體系を承認するとして、それが第一に如何にして一般均衡理論の排斥になるかという點、第二に如何にして特殊均衡理論の擁護

になるかという點にある。

一般均衡理論の描くいわゆる靜態均衡が不均衡の状態を示していないというだけでは、明らかにトートロジーに過ぎないであろう。シユムペーターにおける靜態と動態との二元論も、均衡化と均衡破壊との二つの原理によつて現實解明に迫ろうとするものであり、現實を直ちに均衡の世界と解するものではない。靜態均衡は説明上の一つの假定として、同時に現實の一つのポテンシャルティーとして認められるに過ぎない。杉本教授がシユムペーターを批判するとすれば、それは恐らくかかる二元論に満足しなかつたためであろう。そうしてこれは十分理解できることである。現に當時學界においても、シユムペーター流の靜態と動態との二元論に對しては、兩者の關連、もしくは中間態を求めようとする種々の試みが現われていた。スタッケルベルグやロビンソンの不完全競争の理論がそうであり、スウェーデン派やその他の景氣變動論がそうである。しかしこれらは必ずしも靜態均衡の想定を排するものではなかつた。靜態において無視された或る種の因子を導入することにより、もしくは靜態において常數とされた或る種の關係を變數と見ることによつて、原理的な展開が企圖されたのであつた。しかし杉本教授の行き方はこれらとやや異つていた。假定としても、ポテンシャルティーとしても、靜態均衡を排しようとしたのである。教授によれば、靜態は「事實に適合しない假定」であり、また「時間からの抽象は絶對的に不可能」であるというのである*。

* 中山教授に對する杉本教授のボレミツクもこの點にあつた。中山教授は靜態と動態との原理的關連を資本の理論に求め、この意味でシユムペーターの二元論を克服しようとしたと解し得るが、杉本教授は始めから靜態的假定を持ち出すことを拒否した。

然らば進んで、靜態均衡の想定を離れ、不均衡體系を考えるために、どうしてマーシャルの特殊均衡論がもち出されたのか。マーシャルに關して杉本教授がとくに注意を向けたのは、弾力性概念であつた。教授はこれをもつて「現實の經濟世界を分析すべき理論的武器として極めて生産的なもの」(『理論經濟學の基本問題』一六四頁)ともいつている。そう解するについては二つの點が考えられていたようである。一つは、ムーアの企てている如く、弾力性に時間の要素を導入することによつて、統計的に測定し得る需要曲線又は供給曲線に至り得るからである。いま一つは、いわゆる「蛛蜘蛛巢理論」に見られる如く、弾力性の係數にもとづき均衡への收斂と均衡からの離反との過程が明らかにされるからである。このことは、靜態均衡論が時間を抽象し、且つ一義的に均衡化を結論していることに對し、まさに反對の理論的方向を指示するものと、教授は考へていたようである。しかしこの主張は必ずしもそのまま承服し難い。マーシャルの場合にも、弾力性を可測値と考へる前に、その根柢には、時間を抽象したシェデュールが考へられてはいなかつたか。^{*}また蛛蜘蛛巢理論においても、均衡化と不均衡化とは等しくポテンシャルティーとして認められ、直ちにそれが不均衡化の體系に導くとは言い難いのではないか。^{**}ここでも教授は、均衡を假定又はポテンシャルティーとして認めることを拒み、從つてマーシャルをとり入れながらも、そのような一面を棄てて、むしろ直接現實の不均衡體系に迫ろうとしたのである。

* ここでムーアもまた明らかにワルラス體系から問題を出發せしめて注意したい。

** 蛛蜘蛛巢理論における收斂・擴散・循環などの關係は、現實を分析するための型の分類と考へられる。のみならず、その分析は、それ自體としては、時間を抽象した曲線の上で考へられる。つまり、均衡の成立過程と變動過程とを分けるならば、變

動過程において始めてエクスプリシットに時間が導入されるのであり、しかもそれは時間を抽象した分析と原理的には對應するものとして接續されている。

杉本教授の以上の主張には多少の無理があつたが、それにはもう少し別の根據をさぐらねばなるまい。教授によれば、特殊均衡論は部分についてのみ均衡を考え、部分間においては、従つて全體としては、むしろ不均衡を考えるものであるという。弾力性についても、結局教授の主張するところは、部分弾力性係數間の不均衡ということにある。つまり經濟變動の過程において、たとえ各個別經濟はそれぞれ均衡を意圖するとしても、個別經濟相互の間には不揃いが現われるというのが教授の着目するところであり、これを「社會的不均衡」とか「異質的發展」とか呼ぶ。教授自身の言葉によれば、それは次の如く説かれている。

「資本主義經濟の内部にあつては、個々の企業の『適應』行爲が他の企業との間の關係の不均衡擴大となつて現はれ、この不均衡はついに經濟全體の恐慌的整理を通じてのみ清算されるのである。」（『理論經濟學の基本問題』三七頁）

「各の經濟主體は、自己の特有なる經濟的能力に従ひ、最も合理的なる經濟計畫を樹立し、その個別經濟計畫に應じた單位經濟的均衡を實現する。そしてこの場合、彼等のなすところが、社會經濟的にみて合理的であり均衡的であるかどうかを、ほとんど顧慮しないのである。いな資本主義社會にあつては、個々の經濟主體は、しばしば社會經濟的不均衡を利用して、その個別經濟計畫を樹立し、單位經濟内部にあつて最も計画的に均衡的に行動するが故にこそ、社會經濟的には却つてますます不均衡を増大せしめることさへあり得るのである。」（同書、一五八―九頁）

もしそうだとすれば、教授の趣旨は一般均衡理論における嚴密な競争の假定を否定することにあつたとも言ひ得る。ただこの場合にも、不均衡をもたらす原因が競争の不完全にありというのならば、まず完全競争の原理を明らかにし、

ついで障碍的要因として、例えば不確實性とか非競争群とかを導入すればよいかも知れない。しかし恐らく杉本教授はもつと積極的な原理を不均衡について求めたのであろう。マーシャルをもち出したのも、マーシャルにあつては、均衡というような力學的類同よりも、むしろ成長というような生物學的類同が重んじられているからであり、これによつて一般均衡論における「機械論的」なもののへの對立が考えられているからであらう。もしそうならば、ここでおとりあげられてよい一つの問題は、マーシャルの「代表」の概念であると、私は思っている。それは個別的なものの偏差を許す概念である。個々の企業はそれぞれ浮沈盛衰の運命にさらされながら、全體として産業が或る水準に保たれているとすれば、そのような水準に應ずる企業が「代表的」企業である。ここでは明らかに個別的なものの異質的多様性が考えられており、少くとも一般均衡理論における如き同質化は拒否されていると言える。従つてもし杉本教授が均衡理論における機械論的同質化に反對するとすれば、マーシャルの「代表」の概念こそ注意を向けて然るべきであらう。それは今日いう巨視的分析における「集合」概念に導かるべき構想であつた。集合概念について、その内部の構造を問うならば、多分に杉本教授のいう異質的構造に近いものを考えねばならないであらう。しかし杉本教授は、發表された論文に關する限り、マーシャルの「代表」概念をこのやうには進めていない。

* マーシャルに關するものとしては、杉本教授編『マーシャル經濟學選集』（昭和十六年）の「解説」や、戦後の論文「近代經濟理論とは何か」（『經濟評論』昭和二十三年八、十、十一月號）なども、併せて参照しなければならない。

ただここでお問題が存する。もしマーシャルの代表概念をとり入れるとなると、いわゆる特殊均衡と稱するものは單なる部分均衡ではなくなるであらう。代表というのは單なる部分ではなく、全體を代表する部分であり、代表に

ついで均衡を考えたとすれば、全體として均衡を考えたことになる。しかも、マージナルにあつては、全體として、杉本教授の解釋されるよりも、はるかに調和論的であつた。いわゆる均衡分析も排斥されていない。ただそこには機械論的な均衡分析を外側から包む生物學的類同の經濟觀があつた。杉本教授の第一期における「不均衡」もしくは「異質的構造」はマージナルのそういう面を狙つたものとも解されるが、しかしそれにしては餘りにも強く均衡分析への反對が力説され過ぎたようである。しかもこの時期に杉本教授が好んで用いた分析の武器はむしろ弾力性の如きものであつて、それは明らかに廣い意味での均衡分析に屬する概念であつた。もしそうならば、均衡理論の基盤の上に靜態の前提を變容していくという普通のアプローチがとらるべきであつて、この點は杉本教授の立場に最後までまつわる難點であつたように思う。

三 自由に對する「統制」

杉本經濟學の第二期では、その觀點に少からず推移が見られる。ここでは統制經濟という問題に關心が寄せられ、理論と政策との交渉がとりあげられている。それはすでに昭和十四年の「經濟發展の過程と弾力性概念」なる論文にうかがわれるところであるが、例えばそこには次のように述べられている。

「我々は、いま、經濟の自動的調節作用がその機能を部分的に喪失した、ヨーロッパ大戰後の經濟社會に身をおいてゐる。かくの如き社會について諸種の經濟諸量間の部分弾力性係數及びその正常的變化を確定すれば、これら係數相互の間に一定の不均衡關係が存在してゐることを知るであらう。これをそのあるがままに是認することは、理性的存在としての人間が堪え得ないこ

一橋論叢 第二十九卷 第五號

ろである。我々は自らこの不均衡を解消せしむべく、經濟的構造變容のために實踐的行動に驅りたてられ、一部の弾力性係數を變化せしめようと努力するであらう。この努力の跡こそ、現に我々の眼前に進行しつつある統制經濟の波にほかならず、かくの如き實踐的行動に於て、經濟的發展の過程の主體的側面は理解されるのである。*（『理論經濟學の基本問題』二七九頁）

* なお『理論經濟學の基本問題』の序文に「統制經濟を對象とする今日の理論經濟學は、何はともあれ、主體の論理を拒否するものであつてはならない」云々の敘述がある。ここで主體というのは政策の作用を指し、當時の政治經濟學の主張者の用語であつた。

ここでは明らかに統制經濟の問題がとりあげられ、理論的政策化が目指されている。第一期の不均衡體系の觀點はここではむしろ「不均衡の解消」という觀點に移つていつた。然らばこの場合不均衡の解消は再び均衡理論に戻ることにならないか。現實の經濟を不均衡と見るのに對し、政策的に均衡化の回復をもち出すことは、普通に考えられる道行である。現に當時學界の問題になつていたピグーの「厚生經濟學」やランゲの「經濟計算論」の立場は明らかに均衡理論の下に展開され、生産資源の計畫的配置をとり扱うものであつた。しかし杉本教授は問題をこの方向に進めなかつた。教授は別の立場から統制經濟の原理を探求し、それは昭和十五年の論文「統制經濟と流動性原理」の主張となつて現われた。

流動性なる概念がケインズに由來するものであることはいうまでもないが、杉本教授はこれに短期的なものと長期的なものとを分け、短期流動性をもつて自由經濟の原則と解し、流動性を長期化するところに統制經濟の根據を見出し得るというのである。それは主として金本位制度との關連において説かれているが、いま教授の言葉からその趣旨とするところをうかがつて見よう。

「古典的金本位制は、結局において、任意のときに金に換價する可能性といふ意味における短期流動性の原則に立脚し、國民經濟的に固定された投資をも個別經濟的には任意の時に流動化する可能性を確保してゐた。しかもこの時代における諸個人の經濟活動の起動力たりしものは、いふまでもなく營利の原則であり、この原則は個別經濟的な短期流動化の可能性を要請してゐた。」（『統制經濟の原理』一八四—五頁）

「ただかくの如き形における制度的統制は、諸財に對する欲求擴大の速度が國民的生產力發展の速度を著しく逸脱せる場合に起り得べき萬一の破局を防止するといふ、いはば消極的な效用をもつ反面、國民的生產力發展の速度を金供給の弾力性が許容する低き水準に繋縛するといふ、一つの短所を伴つてゐた。」（同書、一八五頁）

「古典的金本位制度が國民的生產力の發展を阻止すべき桎梏となるといふ如上の事情は、ドイツ・アメリカ・日本の如き新進の産業國にあつてはさらに顯著であつた。……「これらの國々で採用された」一聯の金融政策は、貨幣の供給をある程度において金供給の狭き制限から解放し、國民生產力をできるかぎり自由に發展せしめんとするにあつたが、それは他面において、流通及び生産過程に投下固定せられた『流動的』價値を終局的に金に換價するまでの時間を延長し、しかるかぎりにおいて、國民經濟的には、短期流動性の原則を若干長期化する作用を伴つてゐた。」（同書、一八八頁及び一九〇頁）

一般には流動性とは、キャッシュに換えることを意味し、必ずしも狹義のゴールドに換えることを要しないと思われるが、それは暫く措く。流動性の問題は、社會全體としては、生産量に對する貨幣量の割合を考へることになり、その場合、貨幣量が小でヴェロシティーが大であることもあれば、貨幣量が小でヴェロシティーが大である場合もある。杉本教授の短期流動性というものは、この意味からすれば、貨幣量が小でヴェロシティーが大である場合を指すのであらう。金本位制度は貨幣量供給の制限條件と解され、自由經濟的な諸々の金融的・流通的機構はヴェロシティーを大ならしめる條件と考えられている。ところで、生産量の増大に應じ貨幣量の制限が桎梏となるに至り、金本位制

度から離脱が企てられたことは一應認められるとして、然らばヴェロシティーは如何に考えらるべきか。生産量の増大があるならば、ヴェロシティーもいよいよ大となる必要があるとも考えられるが、杉本教授はここで長期建設的な資本固定化をとりあげて、むしろヴェロシティーの小となる場合を考えているようである。しかし資本の固定化が直ちに流動化を妨げるものでない限り、問題はむしろ或る種の資本固定化が個別経済的な流動化によつて應じられなくなつたところに求められなければならないと思う。即ちケインジアン用語を借りれば、個々の企業の利潤獲得の立場からする投資機會の不足にこそ問題があり、流動性の短期・長期の區別は結果であつて原因ではない。

かかる疑問があるにせよ、ここで杉本教授が一般均衡理論に對立する途を一應ケインズに求めたことは、教授の經濟學展開の上から十分注目してよい。ケインズもまた廣い意味では均衡理論に屬すると言えるが、そこには今日の流行語でいえば、微視的理論に對立して巨視的理論——杉本教授自身の語でいえばむしろ「社會經濟的動態論」——が求められ、杉本教授もこれを擷取しようとしたのである。弾力性という概念についても、前の價格に關しての弾力性に對し、ここでは集合的な所得に關しての弾力性が考えられている。もつとも杉本教授は巨視的方法をもつてケムブリッジ學派の方法と考えていたようであり、もし私が前段に指摘したように、マーシャルの「代表」概念とケインズの「集合」概念との間に關連を認め得るとすれば、その限りにおいて杉本教授の解釋も理解できる。ケムブリッジ學派には個別的なものの間の異質的偏差を或る程度許しながら、全體的なものを考えようとした見方がある。

ところで杉本教授は、第一期ではマーシャルによつて異質的構造を導いたのに、第二期でケインズについてはその體系がむしろ等質的であることを力説しているのである。否、ここではケインズを含んで一般にイギリス經濟學は等

質的經濟構造の理論であるとしている。この點は如何に理解すべきであらうか。この場合、教授の異質的構造という言葉は前のと餘程違つた意味に解釋されているのである。このことは、杉本教授がファーンヴァル流の「複合社會」について指摘しているところに見られるように、各種の社會層や各種の經濟形態の融合を指してとくに異質的といっているのである。即ち流通經濟と自然經濟との併存、高度の工業化と古い農業様式との混在が、ここにいう異質的經濟構造である。第一期ではむしろ流通經濟そのもののうちに能率や貧富の差にもとづく異質的構造が考えられたのに、ここでは流通經濟と自然經濟との如く幾つかの原理の複合が異質的構造と呼ばれている。かくてイギリス派の經濟學はむしろ流通經濟という一つの原理によつて支えられている等質的構造の理論であると、教授は見るのである。これに關連して、いま一つ大切な點は、前の場合には異質的構造から不均衡が導かれたのに對し、ここでは異質的構造における融合體系が存すると解され、かかる融合體系に應ずる統制方式の樹立が必要であると考えられているのである。これが杉本教授の第二期の觀點であるが、そこには第一期との間に多少關連の不明確な點を残すとはいへ、同時に教授の視野が著しく擴げられていつたことを認めなければならないであらう。

四 調和に對する「矛盾」

戦後杉本教授が發表された最初の論文は昭和二十一年の「近代理論經濟學とマルクス經濟學」であつた。これは教授のその後の活動を規定した重要な勞作である。ここで教授の觀點はマルクス經濟學の積極的な攝取に向けられ、次の如く説かれている。

「いわゆる『近代經濟理論』は基本的には、資本主義經濟が調和的に發展することを認めているから、『經濟の自動的調節機能』に對して必ずしも全面的な信頼をおかなくなつた最近の學者たちにあつてさへ、需要および供給の均衡を無批判的に前提したり、また均衡の自然的成立を論ずることも、あるいは許し得ることであるかもしれない。しかしマルクス經濟學は、かくの如き調和論とは對極的に對立するものであるから、資本主義がその發展の過程において必然的均衡を擴大してゆき、同期的には恐慌によつて、終極的には組織そのものの崩壊によつて、この不均衡が強力的に止揚されざるを得なくなる必然的過程を、マルクスの價值價格論の基礎のうゑに理論的に説き得るものでなければならぬ。」（『近代經濟學の理論的性格』二〇四頁註）

このような第三期の觀點を、私は調和に對する矛盾の主張と解したい。矛盾という考え方が以前にもないわけではない。一つの例をあげれば、「現實の經濟生活は、たがひに矛盾對立し、その矛盾を不斷に止揚しつつも、また新たな矛盾をその胎内にはらんでゆく過程である」（『理論經濟學の基本問題』二二頁）という如き句がそれを示すであろう。しかし第一期ではマーシャルに依據しつつ不均衡もしくは異質的發展を説こうとするにとどまつて、マルクスの矛盾の考え方は少くとも前面には現われなかつた。また第二期では、資本主義經濟を直ちに矛盾とは考えず、むしろ古典的な自由經濟の桎梏に對する統制經濟の修正の可能を考えたのであるが、いまやこの種の修正論には批判的な立場をとるようになった。現實的認識と實踐的要求との結合はすでに理論的政策化として第二期でとりあげられたが、それはいまや資本主義の危機意識と關連づけられるものに變つていつた。かくてこれまで不均衡とか異質的構造とか名づけられた教授の中心課題はマルクスの階級對立にもとづく矛盾と結びつくに至つたのが戦後の特色なのである*。

* 私はここで教授の「價值判斷」の變化については問わないであらう。以下主として述べたいのは方法的な問題である。

教授の前掲論文「近代理論經濟學とマルクス經濟學」はランゲの一論文への批判を内容とする。ランゲは近代理論

の立場からマルクスを攝取しようとする學者であるが、彼によれば資本主義發展法則についてはマルクスをとり入れるべきであり、價值價格の解明については近代理論に學ばなければならないという。杉本教授はこれに對し全く逆のことを主張する。教授によれば、價值價格の理論についてはむしろマルクスの資本主義本質の鋭い把握をとり入れるべきであるが、マルクスでは資本主義の現象把握たる「世界市場および恐慌」の問題が豫定の計畫にありながら十分展開されずに終つてゐるというのである。近代理論のとり扱う均衡・不均衡はあくまで市場現象分析の道具であり、本質把握としてはマルクスのな労働價值説に至らねばならぬというのである。そこに第三期の新しい問題がある。

ここで價值價格論というものを如何に解するか。労働價值説をとるかとならないかは、價值價格論のとりあげ方如何に依存する。ランゲやその他の人々（ジョン・ロビンソン及びクラインを含めて）が、マルキシズムに多分に同調しつつも、なお労働價值説をとらなかつた根據は、彼らがどこまでも「現象論的」に價值價格論をとりあげようとしたからであらう。「現象論的」というのは價格・需要量・供給量等經驗的に確定し得る經濟諸量間の函數關係を據りどころとして價格現象を説こうとすることをいう。これに反し、労働價值説をとり入れるべきであると杉本教授がいうのは、むしろ「本質論的」に、即ち價格現象の基底に横たわる「本質としての價值世界」を見ようとするためである。教授が正しく指摘してゐる如く、多くの近代理論家たちは、本質論又は實體論としての價值論を非經驗科學的なものとして排斥し、問題をもつば現象論又は機能論に限つて來た。この方向からいえば、労働價值説は、（また功利主義的解釋と結びつく利用價值説も）、經濟科學的分析の埒外に追われる。ところで、杉本教授はこの種の現象論的立場が古いマツハ流の經驗主義にもとづくものとし、現代物理學では再び本質論的立場が持ち出されてゐると主張する。

そこには機械論的な経験主義から「實踐的な経験」主義への移行が見らるべきであり、經濟學については労働者階級の實踐的世界觀にもとづく評價基準が價值價格論の基底に考えられねばならず、これを最もよく解明したものがマルクスの労働價值説だといふのである。

* 杉本教授の實踐的经验主義といふのは、教授自身の直接論及はないが、レーニンのマツハ主義批判が根柢になつてゐるやうに私には思われる。

教授の物理學に對する解釋の正否については、私はこれを判定する資格をもたない。しかし一般に經驗科學が經驗的に確定される事實のみを信頼するという意味は、單に狭く知覺主義にとどまるものではないと私は解している。觀測上の不確定性について確率概念の如きものが導入されるといふのは、知覺によつてはとどかない場合の處置に他ならないであらう。ただこのような場合も、それはむしろ經驗的確定の意味が擴充されたと解すべきであり、どこまでも經驗的確定が基礎になつてゐるというべきであらう。いわゆる現象論的な價值價格論の立場からいつても、例えば「名目的」な測定値に對して物價變動を除去した「實質的」な關係が問題になるし、また「個人的」な評價に對してそれらを集合した「社會的」な評價が問題になるが、それは確實に經驗的に確定し得るものを手がかりとして、これを擴充しようとするものに他ならない。擴充には作業上の假定を明らかにする必要があるが、それは實體概念を導入することではない。これらの事情は最近の新しい厚生經濟學の動きに最もよく現われているところであつて、そこでは明らかに古い厚生經濟にまつわる實體論的解釋が棄てられつつあると私は見ている。

いうまでもなく杉本教授はこのやうな方向に對し強く反對するのである。作業上の假定といふやうな解釋には満足

せず、實體論的な解明を要求するのである。教授によれば、マルクスの労働価値説においては、労働するものの立場から眞の實體論的解明が行われたというのであり、そこでは、「労働するという活動において価値判断が行われ、価値判断をしながら労働する結果として社會的抽象労働が對象化され、そこに価値をもつた對象が商品として生産されるものとみた」という。いまこの點を承認するとして、さらにわれわれの知りたいのは、こういう労働価値説の価値観そのものが現象論的な價格又は交換割合の説明とどのように關連づけられるかということである。マルクス『資本論』の第一卷と第三卷との關係という古くからの論議に對し、杉本教授がどのような解釋を下すかということである。遺憾ながらこの點については遂に詳しい展開が見られなかった。

次に恐慌論についても、教授は問題を提起しただけで、十分な論述を見ずに終つた。最後の作『經濟學新體系Ⅰ恐慌』の「總説」は教授がまともから恐慌論をとりあげた唯一の文獻であつたが、そこには近代理論的景氣理論とマルクスの周期恐慌論とを並べて學說史的展望を與えているだけで、教授の自説をうかがうには不十分であつた。僅かな論述のうちから、教授がレーニンの市場理論に多大の關心を寄せていたことは付度し得るが、その場合の「不均衡及び不均等の發展」はこれまで教授が近代理論から汲みとろうとした「不均衡」もしくは「異質的構造」と理論上如何なる關連で考へべきか。それは遂に教授から親しく聞くことを得ない。

教授の第三期における觀點は、極めて明確にマルクスの攝取にあつた。しかしそれがどこまで教授のイデオロギーの問題として理解すべきかは私にはわからない。ただ教授は決して單純なイデオロギストではなかつた。むしろ、眞摯な社會科學者として早くからマルクスに關心を寄せ、それが第三期の立場を形成するに至つたことを私は重視した。

い。しかもそれは教授がそれまで近代理論のなかで考えられるだけ考えていつた中心課題の究明と深いつながりをもつものであつて、そこにはなお未完成の多くの仕事を残したとはいえ、教授のここでの立場のうちには、われわれもまた同じ社會科學者として必ずや逢着せしめられる尊い苦慮を見出さなければならぬのである。

五 反均衡理論的立場

以上私は杉本經濟學に三つの時期を分け、教授の學問的遍歴の跡を概観して來た。教授の中心課題は現實經濟の不均衡もしくは異質的體系と呼ばれるものであつて、それはたしかにわれわれもまた深く思いを潜めねばならぬ課題である。杉本教授が最後の第三期において到達した立場は明らかにマルクス經濟學によつて資本主義の矛盾という觀點からこの課題に迫ろうとした。この最後の立場から前の第一期及び第二期をそれに至るまでの過渡的なものと解釋することも可能であらう。それはむしろ極めて簡単な解釋であらう。しかし私はここでそういう解釋をとらなかつた。

杉本教授の學問的遍歴の各時期に示された諸論點には、いずれももう一度振り返つて考え直すべきものがありはしないかと思われるからである。また教授が第三期に達した立場についても、マルクス經濟學の攝取に關心を寄せながら、なおこれまで深く立入つて來た近代理論の精緻な分析から離れたわけではないであらう。教授が企てられた他説批判の面を暫くおき、その中心課題の建設的な展開の面に注意を向けるならば、われわれはそこにこれまでの諸論點がなお整理を要することを見出すであらう。たしかに第一期における「不均衡」は第三期における「矛盾」によつて内面的に深められたであらうが、しかし再び市場現象に戻つて、近代理論的な景氣變動論とマルクスの周期恐慌論との

對決をもつと深く掘り下げようとしたことは教授自身にとつても今後の問題でもあつた。また第三期における矛盾の考え方は現實經濟をいわば病理學的につかむことになるであらうが、それは第二期におけるいずれかと言えば治療學的な觀點——理論の政策化——と無關係には考えられないであらう。さらに教授の異質的體系なる問題そのものについて、個別經濟間の偏差、諸經濟形態の複合、階級對立など、いずれをも併せ考えることによつて、問題の解決をもたらすべきものと言えよう。私がここで第三期を單に到達點と見ず、むしろ三つの時期に示されている諸論點を並列的に明らかにしようとして來たのは、このような解釋のためである。教授の中心課題をわれわれ自身のものとして展開を期するためには、教授のとりあげられたこれまでの諸論點のすべてを綜合的に眺めなければなるまい。

それにしても、杉本教授が最初からマルクス經濟學を心にいだき、そこから常に均衡理論なるものに反對の立場をとつて來て、それが第三期において明確な形をとるに至つたという解釋は果たして認められるであらうか。この場合、教授の反均衡論的立場というのはどのように解さるべきか。すでに論及したように、教授の中心課題たる不均衡ないし異質的體系がそれ自體として必ずしも均衡理論の否定にはならないし、むしろ均衡理論のなかで精密な形で處置し得ると私は考えているものであるが、この點について教授自身がそのように考えなかつたことは疑うべくもない。たしかに教授自身は、三つの時期の關連について、もつと内面的な發展を考え、反均衡理論的立場を貫こうとしていた。教授が第三期において、とくに學說史的に、近代經濟理論とマルクス經濟學との關連を解明しようとしたのは、それを示すであらう。ローザンヌ派の「機械的經驗論」に對立してケムブリッジ派の「實踐的經驗論」を考え、さらに實踐的なものについてケムブリッジ派とマルクス派との差異を明らかにしようとした教授の構想は、同時に教

授自身の學問的遍歴の理由づけでもあつた。教授自身は始め主としてローザンヌ派の一般均衡論への反對を主張していたが、いまケムブリッジ派を含む近代理論そのものへもやや批判的となつた。ここに考えなければならぬ二つの面がある。たしかに教授の思考方法のうちには一面近代理論のそれと相容れないものを含んでいた。教授は、假定とか模型とかいう操作的又は實驗的な論理に對し、直ちに「現實適合」とか「實踐」とかいう考え方を持ち出して反對しようとした。結果の檢證によつて假設を変えていくというような態度には満足しなかつた。しかし、他面、教授自身は明らかにこのような論理によつて多くの業績を示し、従つてこれに反對したのはむしろ教授自身の眞意ではなかつたとも言える。教授がしばしば好んで引用した言葉は、マーシャルの「溫い心と冷い頭腦」という句であつた。これが論理的分析の否定を意味しないことはもちろんであるが、教授は形式主義を避けようとしてしばしば假設や實驗のもつ論理的意義をうけ入れようとしなかつたのではなからうか。教授の態度には、一面極めて理論的でありながら、他面非理論的な固執性があつた。假設や實驗の論理的操作に對立するものは實踐的價值判斷の樹立であるが、教授はこれら二つを、マーシャルの句にもとづいて、やや常識的に統合しようとしたのではないか。もしそうだとすれば、教授のこのような立場を直ちにマルキシズムにむすびつけるのは、なお疑問の餘地を残していると言わなければならない。

教授の學風は極めてボレミックであつた。もちろんそのことは多少とも學者として具えている性格には違ひないが、教授の場合は特に著しかつたように思う。もし學風に假りに二つの型を分け、一つは敵陣に飛び込んでいく型、他はむしろ味方の陣營で協力していく型とに分けるとすれば、教授の場合は前者に屬するであらう。教授は論争によつて

みの學問の進歩がもたらされると信じた。教授の仕事はいずれかといえはまず批判から出發した。最初の仕事はシュムペーター批判であつた。不均衡の問題をいさきながら、不完全競争や景氣變動に向わずに、一般均衡理論の批判を通じて、これと特殊均衡理論とを對立せしめた。また第三期における教授はマルクス經濟學の擷取を志しながら、直接勞働價值説や恐慌論に向わずに、ラングその他の批判に入つていつた。これらのことは、前述の如く教授の學風がボレミックであつたことを示すものと、私には思われる。もつと一般的には、教授は反均衡理論的立場に立ちながら、直接マルクスには赴かず、むしろ均衡理論の内在的批判を企てていつた。しかしおよそこれらのことは、教授がやはり均衡理論の長所を認められ、擷取すべきものを擷取しようとしたためでもあつたことを忘れてはならない。いずれにせよ、このような教授の學風からは批判的な面が強く浮彫りされていつて、建設的な面になるとそこに多分に疑義を残す結果となつたように私には思われる。

最後に私は、杉本經濟學についてここで極めて蕪雜な概觀を與え、時に批判がましいことを述べたことについて、自ら深く恐れるものである。教授の學問的態度は、多くの人々が等しく認める如く、「一字一句もゆるがせにしない」嚴密なものであつた。それは教授がボレミックな内在的批判を得意として、極めて用意周到であつたことを示すものであろう。これに對し私のこの一文はいかにも蕪雜である。ただ私はここで、教授の尊敬すべき學問的遍歷を通じて、教授の中心課題について、そこに含まれている諸論點を明確にしようとしたまでである。そうして私自身の態度は、それをボレミックにとりあげるよりは、むしろ今後の建設的展開のために、そこからでき得る限りの教示を汲みとらうとしたのである。